

文化高知

公益財団法人高知市文化振興事業団

室戸貫歩を終えて

壬生 琴賀

私は高知大学に入学するまで高

知大学空手道部が主催である「室戸貫歩」という行事を知りませんでした。空手道部に入り主将になったあと、大学側から「室戸貫歩の開催はどうしますか？」と聞かれたときに初めて知りました。その後先輩から過去の資料をもらい、室戸貫歩について教えていただきました。

室戸貫歩は高知大学空手道部が部員の心身の鍛練のために始めた伝統のある行事で、高知大学朝倉キャンパスから室戸岬までの約百キロを、夜を徹して歩きます。空手道部員のほか学生や教職員、学生OBらが参加し、毎年十一月下旬～十二月上旬の土曜と日曜日にかけて行われていました。しかし新型コロナウイルスの流行により、二〇一九年（第五十九回）の開催

を最後に中止が続いていました。

二〇二二年も室戸貫歩を開催したかったのですが、その年の七月頃から新型コロナウイルスの第七波が流行りだし、なかなか収まらなかったもので、九月頃に中止を決めました。お世話になっていた警察署や消防署などに室戸貫歩の中止決定と、二〇二三年は開催したいと思っていることを伝えるに挨拶に行きました。

二〇二三年は新型コロナウイルスが第五類に移行したことから九月頃に感染が落ち着いていたため、四年ぶりに室戸貫歩を開催することに決めました。しかし久々の開催であること、空手道部や大学職員の中に室戸貫歩の運営にかかわったことがない人が多かったことなどから、今回は参加条件を「高知大学の学生及び教職員のみ」と

しました。前年に一般の方から室戸貫歩の開催の有無について数件問い合わせがあり、室戸貫歩を心待ちにしている方がいらつしやることを知っていたので、一般の方にも参加していただきたいという大学職員の方の思いもありました。しかし経験者が少ないことに加えて、空手道部員も減ってきており運営できる者がわずか四人だったため、残念ですがやはり参加者を絞らせていただくという結果になりました。

高知大学の関係者に絞ったことにより、今回はMicrosoft forms（以下forms）という情報収集アプリを用いて参加者の事前登録を行ってみることにしました。これまでは高知大学の人文社会科学部棟前で参加の受け付けを行っていましたが。しかし、その場で参加者

の名前の確認や参加登録、料金の支払いなどを行うことは非常に大変だったそうです。そのため今回は初の試みとしてformsを用いて参加者が自ら事前登録を行い、のちに料金を支払いに来ていただく形にしました。formsを用いたことで事前登録していただいた方の名簿や領収書をスムーズに作成できたことに加え、参加人数が例年より少なかったことにより、混雑せず受け付けを行うことができたと思います。

前回の参加者数は約四百五十人でしたが、今回は七十三人でした。四年ぶりということで室戸貫歩について知らない学生も多い中、予想よりも多くの方に参加していただき嬉しく思います。今までお世話になっていた道の駅や警察署、消防署の方々に開催決定の報告と協力をお願いのため挨拶回りをした時、皆さんが室戸貫歩のことを覚えてくださっていたこと、そして快く協力していただいたことが、とてもありがたかったです。開催にあたり道路使用許可の申請や保険会社への相談、保険料の振り込みなど初めて行うことが多く、かなり戸惑いましたが、大学の学生

支援課の方にサポートしていただき、何とかそれらを終えることができました。また、室戸青少年自然の家の方々とお話しした際、室戸貫歩の休憩スペースやゴール地点のテントの設置のみならず、万が一地震が起きた際の避難対策や休憩スペースに男女の仕切りを付けるなどの提案をしていただきました。私にはない考えだったので、より一層、参加者の方への配慮について考えるきっかけになりました。



いよいよ室戸貫歩がスタート！

当日の運営業務は、空手道部員四人に加え、学生支援課の方々十名ほどに協力していただきました。朝食キャンパスで開会式を行い、スタートを見送った後、学生支援課の皆さんには主に道中のリタイア者やバスの案内など参加者のサポートを行っていただき、空手道部員たちはゴール地点で貫歩者を待っていました。夜間にゴールされる方もいるため、ゴール地点はランタンや電球で飾りました。また、自分たちが一晚過ごすためタープテントを設置し、周りをブルーシートで囲みましたが、日が暮れるにつれ、風が吹きとても寒かったです。先輩と交代しながら休憩スペースに行き、三時間ほど仮眠をとりましたが、かなり疲れました。休憩スペースは暖房と布団はありましたが、窓が全開だったのでかなり寒かったです。

室戸貫歩の運営をして、体力や精神がすり減っていくように感じましたが、飴玉を差し入れしてくださった方やご自宅からゴール地点まで歩いて来られた一般の方、参加者の友人の皆さんと話をするうちに私の心も温まりました。また、貫歩者の笑顔は体力を回復さ

せてくれました。

室戸貫歩の問題のひとつとして、開催のために準備しなければならぬことがとても多く、それに非常に時間を取られるということが挙げられていました。貴重な時間を有効に使うため、例年は参加賞として用意していたお菓子の詰め合わせを、今回は栄養補給バーに変更するなど工夫して時間の節約を図りました。また、次回への課題としては予算のことが挙げられます。参加料金は一人千円です。今回は今までの開催で余ったタオルやタスキを使用したので参加料金内で経費を収めることができましたが、もう余りはなく、次回の開催時にはこれらを発注しなければなりません。そうすると七十名ほどの参加料金では足りず、部費で賄うなどの対策をとらなければなりません。大学に金銭援助を申請することができるので、この件に関してはまたじっくり考えようと思います。

二〇二四年もできれば室戸貫歩を開催したいですが、私の就活が始まるので難しいかもしれません。現在一回生がいないので、来年度は一・二回生を中心に新入部員を

集めることにも尽力したいと思っています。

最後になりましたが、参加者や学生支援課の皆さん及び関係者の皆さんのおかげで大きな事故や怪我無く「第六十三回室戸貫歩」を終えることができました。

心より感謝申し上げます。



ゴールで渡される「貫歩証明書」

みぶ ことか

二〇〇三年 高知市生まれ。
高知大学空手道部主将

なので、単純な郷愁ではない複雑な感情を土佐清水には抱いています。

「ばぶれるりぐる」という劇団名は、高知の方ならお気付きかと思いますが、幡多弁の造語です。発表する作品も幡多弁をセリフにしたものが多く、場所設定も幡多地区を匂わせたものが多いです。

その作風から周りからはたいそう郷土愛が強い作家だと思われています。

その通りです。今すぐにも土佐清水に帰りたい。それはもう魂レベルで走って帰りたい。魂はいつでもアンパンマン号に乗っているし古津賀のサニーマートに寄っている。私の土佐清水への執着はものすごいんです。ただ、その気持ちと同じくらい強い気持ちで帰れないと思っています。

劇作することで生きていきたい私と土佐清水はとても相性が悪いです。

地元に戻りたい自分と帰れない自分。

地元を称賛する気持ちと批判する気持ち。

自分の中の二律背反が爆発しないように「地元の言葉で劇作する」ということをしていると思います。そして今はできるだけ演劇を作って持って行けたらと思っています。

こんな私ですので、大手を振って地元を賞賛するお話は書いていません。

今年の2月29日と3月1日に「かるぽーと」で演るお芝居『川にはとうぜんはしがある』も地元暮らしの妹と都会から戻ってきた姉の感覚のすれ違いや、若者と親世代の認識のズレ。みたいなものを題材にコメディにしています。

宣伝みたいになりましたね。宣伝です。観にきてください。すいません。

できれば若い方に観ていただきたいです。

個人の夢や目標がなくても充実した一生を送れるのが理想だと思います。でも今の日本は残念ながらそうじゃあない。しんどいですが自分からエンジンかけて自分の幸せを探さないといけない仕組みになっています。

「自分の幸せ」は親の願う幸せから遠いかもしれないし、多くの友人の思う幸せから遠いかもしれない。今暮らしている場所にはないかもしれない。

もしかしたら、周りからみるととても異形でへんちくりんなかたちをしているかもしれない。それでもあきらめないで下さい。

と、高知県土佐清水市松尾出身の劇作家は思っています。

文責 竹田モモコ

■ばぶれるりぐる第5回公演「川にはとうぜんはしがある」

開催日 2月29日(木)・3月1日(金)

会場 高知市文化プラザかるぽーと 小ホール

■竹田モモコ脚本担当

NHK地域ドラマ「島根マルチバース伝」

放送日 3月22日(金) 17時～、NHK BS 全国放送



▲公演詳細



たけだ ももこ

1981年 土佐清水市生まれ。

2008年から大阪で役者として活動を始める。2018年、演劇ユニット「ばぶれるりぐる」を旗揚げ。以降、定期的に幡多弁を使用したコントやお芝居を発表し続けている。

2020年に『二十一時、宝来館』で関西演劇祭ベスト脚本賞、『いびしない愛』で第26回劇作家協会新人戯曲賞を受賞。2022年に『他人』で日本の劇戯曲賞最優秀賞を受賞。

普遍的な悩みや葛藤を扱いつつも印象はライト。人物描写に定評があり、思わず笑ってしまう劇作を得意とする。



高知県土佐清水市松尾出身の劇作家

竹田 モモコ

6年前、「私は私を救うんだ」と思って震えながら劇団を立ち上げました。
その時私は36歳でした。

昔からTVが好きでミーハーで自分に妙な自信があり、「何者かになれるはず」と思い込み、高校卒業と同時に、土佐清水市から大阪に出ました。

当時流行っていた美容師で有名になろうとしたり、大阪のアンダーグラウンドで有名だったミュージシャンの界隈をうろついたり。

「何」になりたいか分からない。そもそも世の中に「何」があるのか分からない。とにかく有名になりたかった。今こうやって書くと本当にさもししいし、かわいそう。はっ倒した後抱きしめてやりたい。

そのうち、「大人計画」に衝撃を受け、「ラーメンズ」に背中を押され、大阪拠点で活動している劇団に役者として入団しました。それが26歳の時でした。

そうして大阪で鳴かず飛ばずのまま、つぶしのきかない特殊サブカルおばさんが爆誕してしまったのです。特殊サブカルおばさんは特殊なので、日常で見つけた面白い言葉や現象を「ネタ帳」にせっせと書きためておりました。

30歳を過ぎた頃、自分の何も持ってなさに愕然として、せめて家庭を築こうと思い、演劇をやめ、結婚して、子供をもとうと思いました。だってそれが世の中で「幸せのかたち」として推奨されているから。間違いない。それをなぞろうとしたんです。

でも上手いかなかった。どこかで「私はこんなもんじゃない」という化け物が鎌首をもたげる。行き場のないネタ帳がパンパンに膨らんで爆発しそうになる。

そうしていよいよ気が狂いそうになってからやっと「自分の幸せとはなんぞや？」という課題と向き合い、その答えとして劇団「ばぶれるりぐる」を立ち上げ、劇作家になりました。そうしてからは少し楽になりました。

ものを書くことは苦しいですが、書かないよりは苦しくないです。

世の中で、金銭に見合わぬなにかを発表している人の7割はこんな感じで、気が狂うからしかたなくやっていると私は勝手に思ってます。(後の2割はご両親がお金持ちでアカデミックで日常にあたりまえに文化があった人。もう1割は降りてくる系のガチの天才。)

このように私は自分の幸せがどんなかたちをしているか、どんな自分が理想か、を見つけるのに大変苦労しました。6年前にやっとぼんやりこんなもんかなという輪郭をつかみました。今はそれにせっせと実体を持たせているかんじです。

私は、中学、高校と土佐清水で「生の文化」が与えられなかったこと、自分からとりにいかなかったことを今でも悔やんでいます。

今はインターネットがあるので状況はかなり違うと思います。当時は、これから社会に出る田舎のハイティーンと都会のハイティーンでは、もうスタート地点が全く違ったのです。中学の時、先生に「あなたたちは可哀想だ。」と言われたことをめちゃくちゃ覚えています。本人にそんなこと言うなよ。って思うけど。でもそれはその通りで、音楽はヒットチャートしか聞いたことがなかったし、映画は体育館でみながら三角座りで鑑賞した「対馬丸」しか記憶にない。ましてや演劇なんて見たことがなかった。

どうしようもない「地元ガチャ」。東京生まれ東京育ちの演出家の友人は自分で自分のことを「勝ち組シティボーイ」と揶揄します。

こどもが考え・決め・進める こども主体のまちづくり

畠中 洋行



こどもたちが運営するまち 「とさつ子タウン」

「とさつ子タウン」は、認定特定非営利活動法人NPO高知市民会議が呼びかけて組織した実行委員会や高知市文化振興事業団などが主催し、二〇〇九年から始まりました。小学四年生～中学三年生のこどもたち約四百人が、八月の夏休み二日間だけ高知市文化プラザかるぽーとに誕生する仮想のまちに集い、まちを運営する取り組みです。

こどもたちはハローワークで、約五十業種ある仕事の中からやってみたい仕事を選びます。各仕事場にはそれぞれ専門家がボランティアで参加し、仕事の楽しさや大事にしてほしいこと等をこどもたちに伝えています。

仕事を終えたら銀行に行って、

タウン内の通貨「トス」で給料をもらいます。給料をもらったら、税務署で税金を支払う仕組みになっています。その後、再びハローワークで新たな仕事を選ぶ市民もいれば、稼いだお金でまちの中で飲食や買い物、ゲームなどを楽しんだり、お金を払って学べる



「アカデミー」に行く市民もいます。また、職業経験を経て一定の資金がたまれば、自分で起業することもできます。さらに、市長選挙と議員選挙を隔年で行い、議会が開催されます。

「とさつ子タウン」内では、実行委員やスタッフはこどもたちが悩んでいる時や困っている時に「どうしたの?」と声をかける以外は、こどもたちに任せることを基本としています。保護者もタウン内には入れない決まりになっています。

全国から注目される 「とさつこどもファンド」

「こうちこどもファンド」は、高知市主催の事業として二〇一二年四月よりスタートしました。「自分たちのまちを良くしたい」というこどもたちの思いを実現し支援することを目的に、上限二十万円までの範囲で活動に対する助成を行います。岡崎前高知市長がほぼ毎年「とさつ子タウン」を訪れ、生き生きと活動するこどもたちと触れ合う中から「こどものチカラ」を

実感したことも、「こうちこどもファンド」創設の動きを後押ししたと言えます。

高知市在住または通学する十八歳までの三人以上のグループで、サポートしてくれる大人が二人以上いるという条件を満たせば「こうちこどもファンド」に申し込みができます。応募して活動するのはもちろんこどもたちですが、助成をするかどうかを決める公開審査会で審査をするのも小・中・高校生のこども審査員です。

助成は六月に開催される公開審査会場で決定します。公開審査会では、応募団体がプレゼンテーションを行い、こども審査員と質疑応答を重ねた後、こども審査員によるシール投票で過半数を獲得したら助成が決まります。

助成が決定した団体は、七月から翌年二月末まで活動を行い、三月には活動発表会で取り組みの成果等を



公開審査会の様子

報告してもらおうようになっていきます。このように、提案・審査・活動のすべてにおいて『こどもが主体』となる、全国的にも珍しい取り組みです。

二〇一二年度から二〇二一年度の十年間に（二〇二〇年度は「コロナ」禍で中止）、延べ七十一団体（延べ千八百六十八人のこどもたち及び延べ三百二十一人の大人サポーター）が助成を受けて活動してきました。その取り組み内容は、「防災」「環境美化」「地域福祉」「食」「地域の魅力の再発見」「商店街の活性化」「アート」等々、多岐にわたります。

「こども主体のまちづくり」の魅力・可能性

十年以上続けてきた「とさつ子タウン」「こうちこどもファンド」。これらの取り組みを通して、初めは受動的だったこどもたちが次第に能動的に活動するようになります。「こうちこどもファンド」の活動を継続する中から、「大人と一緒にまちづくりをすることが楽しい」と思うこどもたちが増え、そうしたこどもたちに触発されて周りの大人も動き出すようになり、

従来は大人主体であった地域自治組織の中に、こども・若者主体の部会を設けるに至った地域も出てきました。このように、こどもたちの成長と周りの大人の意識の変化を感じることができます。

こうした「こども主体のまちづくり」の持つ魅力や可能性を多くの人たちに知ってほしいという思いを込めて、日本にミュンヘン市の取り組みを広げ、「こうちこどもファンド」の運営委員長も務める早稲田大学教授の卯月盛夫さんとの共著、高知市の編集協力という形で、二〇二三年十一月二十一日に『こどもまちづくりファンド』ミュンヘンから高知へ』という本を出版しました。

この本では、「とさつ子タウン」「こうちこどもファンド」の具体的内容、それぞれ十年を経過しての成果等を整理しています。さらには、「とさつ子タウン」がモデルにしているミュンヘン市「ミニ・ミュンヘン」の取り組み、「こうちこどもファンド」の仕組みを考える際に参考にしたミュンヘン市「こども・青少年フォーラム」のことなどにも触れ、ミュンヘンと高知の取り組みの比較も記載して

います。

国が二〇二三年四月に施行した「こども基本法」をもとに、今後、全国の各自治体でこどもの意見を施策に反映したり、こどもの社会参画に関する仕組みづくりなど、様々な取り組みが進められるようになると思います。そうした際に、高知の『こども主体のまちづくり』の事例が、全国各地の参考になればいいなと思っています。※詳細につきましては、この本を一読いただければ幸いに思います。



こどものチカラを信じよう！

「とさつ子タウン」は『仮想のまち』で自ら考え行動する体験を通して、社会の仕組みに気づくきっかけづくりとして、「こうちこどもファンド」は『現実のまち』で自ら考え行動する体験を通して、社会の仕組みに参画することを目指し取り組んできました。

こうした取り組みプロセスにおいて、こどもたちは確実に成長する姿を見せてくれます。こどもたちは自ら考え行動するチカラを持っています。大人に求められているのは、そうしたチカラを発揮できる「場（機会）」を提供すること、そして、こどものチカラを信じて託す本気度・覚悟だと思っています。こどもと大人が対等・水平な関係で向き合い、お互いを尊重し合って共にコトを進めることによって、地域のチカラが高まっていくと信じています。

はたけなか ようこう

一九五一年 高知市生まれ。

大学院在学中、地域に四年間住み込み、地域の人たちと一緒に計画を作ることを経験したことがきっかけで、一九七九年に大学時代の仲間と住民参加のまちづくりに取り組む会社を起業。二〇〇六年から認定特定非営利活動法人NPO高知市民会議の事務局長を務める（二〇一三年に退職）。二〇〇七年に「とさつ子タウン」の仕組みを立案しそれ以降運営に携わり、二〇一一年に「こうちこどもファンド」の立ち上げに携わり、現在まで同ファンドのアドバイザーとして関わっている。

第十回〈山中賞〉が発表になりました！

山中 由貴

〈山中賞〉という勝手なことをやりはじめてからもう十回目になるらしい。年に二度、芥川賞・直木賞が発表になる一月と七月に、勤務する書店で発表している。わたし自身がほんとうにおもしろいと感じ、たくさんの人に読んでほしいと思う小説を讀えて、おこがましいとは思いつつ授与している賞だ。

第十回〈山中賞〉は……。〔脳内でドラムロールを鳴らしてください〕木内昇さんの『かたばみ』(KADOKAWA)に決めました！

本が発売されたのは昨年八月。物語は太平洋戦争の戦中そして戦後の波乱の時代を生きる家族を描く。八月に刊行されたことにはも

ちろん意図があるはずだ。かつて日本で起きた戦争への意識がもつとも高まるべきなのだから。けれどもわたしはこの本を、発売当初には読むことなくやりすごしてしまった。おもしろいと評判だったのに。すぐに読んでいればもっとこの作品のためにできることもあったのに。今そう思つてとても悔しい思いをしている。

わたしがこの作品を読んだのは昨年末から年明けにかけてのことだ。もう読み終わろうという元日に、令和六年能登半島地震が起こった。

日本女子体育専門学校で槍投げの選手として活躍していた山岡^{やまおか}梯子^{はし}は、怪我を機に国民学校の代用教師になった。歳は二十五、背

丈五尺七寸（一七三センチ）、体重二十貫目（七五キロ）。いかり肩で腕も脚も太く、日々のたゆまぬ練習で筋肉たくましい、当時の女性としては立派すぎる体型だ。

冒頭であっさりと失恋する梯子には、どこかすつとさせられる。結婚までの腰掛けのつもりだった教員の仕事にやがて情熱を注いでいく彼女は、不器用でまっすぐで正直で、なんだかとてもかわいらしいのだ。

いっぽう、物語にはもうひとりの主人公がいる。大学出で頭はいが、虚弱体質ゆえに兵役を免れた中津川権蔵^{なかつが けんざう}は、流されるまま日雇いから運送の仕事にと、ぶらぶらその日暮らしをしている。妹の嫁ぎ先である惣菜屋には母親も暮らしており、何度か訪れるうちに、

そこで下宿している梯子とも知り合うのだが……。

戦争の悲惨さ、食べもののないひもじさ、徴兵され帰ってこない男たち。厳しくつらい時代を描いた小説は、読むのには気合がいる。わたしも、だからすぐには手が伸びなかった。けれど読みはじめてみると印象は全然ちがった。心が痛むシーンもあるけれど、基本的にはぬくもりがあつて、いつもくすくす笑つていられる。こんなにもページを開くのが楽しい本だとは！ 生真面目な梯子のとんちんかな失敗と奮闘には何度も噴き出し、権蔵ののらくらした態度やぼやきには、ああ人間ってこんなもんだよなあと安心すらしてしまう。

ふたりはやがて恋愛という過程を経ることなくなぜか夫婦になるのだが、その関係性がなんとも素敵だ。そしてふたりの元に、ある事情で血のつながらない子どもがやってくる。教師でもある梯子は、正しいとされることがいとも簡単に覆される時代に、幾度も悩みながら、学校や家庭で、手探りで子どもを育てていく。権蔵もまた、

彼なりに子どもと人と人として真摯に向き合っているのだが、それがまたすばらしく、はっとさせられるのだ。

梯子や権蔵だけではない。ともに暮らす家族みんなが、自分たちの力量の範囲内で互いに補い合い、助け合いながら、子どもたちを守り育てる。そこでは血のつながりは大事なことでない。工夫して食料をやりくりし、誰かの苦手なことを誰かが代わりにやる毎日。戦争という恐ろしい嵐の下であっても、こんなふうな一日一日の暮らしが営まれてきたからこそ、いまわたしたちがその末端に連なっているのだろう。その日々になんとか笑いがあることに涙してしま

う。そうだ、きつと心が和んだときには笑顔も冗談もあっただろう。平和ないまのわたしたちとなんら変わりない喜びや苦労もあっただろう。

能登半島地震の臨時ニュースが目に飛び込んできたとき、わたしはまさに『かたばみ』を開いて読んでいた。家族や家を失ったり、これから先の生活に不安を抱えて夜を明かす人たちがいる。時代は違うものの両者に共通した悲しみやつらさ。その痛みもまた、「いま」あるものだと実感して震えた。だからこそ……だからこそ、物語の「非日常」のなかで彼らが懸命に「日常」を生きる姿に胸打たれ、

またしても涙があふれてきた。

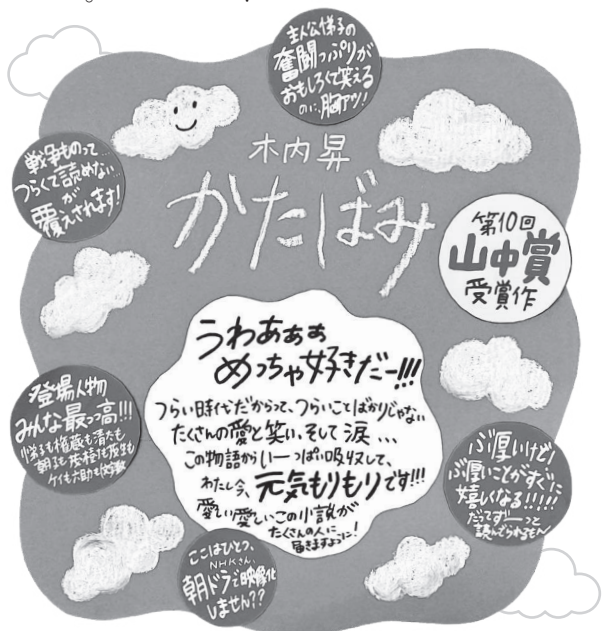
いま地震で「非日常」にいる人たちに、少しでもふとした瞬間の笑顔があるといい。たゆまず生活を続けていくなかで、ときに気持ちを緩め笑い合う、この物語の彼らように。



いまでも戦争はなくならないし、昨日まで当たり前だった日々が当たり前でなくなることもある。そんな世界で、それでも地道に生きていくこと。とてもシンプルなその強さに、わたし以外にも励まされて元氣をもらう人がたくさんいるのではと思う。そして不安な日々になんとかほっこりした気持ちを持てるかもしれない。そんな希望もこの小説には詰まっている。

山中賞にそんな想いを込めて、第十回(山中賞)は『かたばみ』に決まりました。

遅くなったけれど今こそ届けたい。



やまなか ゆき
一九八〇年 高知生まれ。
TSUTAYA中万々店の書店員
なかましんぶん編集長としてX(旧Twitter)をやります。
好きな本について喋るときだけ饒舌になります。

全国大会への挑戦

堀内 知佐乃

高知大学教育学部附属小学校には、課外クラブとして吹奏楽部と合唱部があります。いつ創部されたのかはつきりと記録が残っていないのですが、五十年以上の歴史があるのではないかと思います。私の指導する合唱部は、三年生から六年生までの約三十名の部員があり、主な活動は、学校内の入学式や音楽会などの行事での演奏と合唱コンクールへの参加、大学や附属中学校の合唱部の演奏会への出演などです。活動の中心となっているのは、合唱コンクールへの取り組みです。合唱コンクールといえは、NHKが主催する「全国学校音楽コンクール」、通称「Nコン」が最もポピュラーなコンクールでしょう。その歴史は長く、今年度は九十回目のコンクールでした。平成二十年の頃の高知県大会（小学校の部）には、フリー参加校も含め八校の参加がありましたが、徐々に参加校が減り、コロナ後の今年度は、附属小、高岡第

一小、小高坂小の三校のみの参加となりました。参加校が減ってきたのは、コロナの影響というより、少子化や教員の働き方改革など、学校でクラブ活動として合唱を続けていくことにいろいろな難しさが出てきたのではないかと感じます。中学校や高等学校でも、指導者の地域移行が検討されたり、実施されたりしています。Nコンも今後、実施方法が変わっていくのかもしれない。実は、九十回の歴史を誇るNコンですが、高知県の小学校が四国代表として、その全国大会の舞台に立ったことはないようです。私も、九年連続で四国大会に進出できましたが、結果は銅賞か奨励賞で、全国大会への道は思った以上に険しいです。

全国への道は、遠く果てしないものと感じていたところ、新たな全国大会出場のチャンスが訪れました。二〇一九年に全日本合唱連盟が「全日本合唱コンクール全国大会小学校部門」を新設し、試行期間として五年間は、各都道府県から代表が出場できることになったのです。第一回の小学校部門の全国大会は東京都の新宿文化ホールで行われましたが、栄えある一

番初めの演奏団体は本校合唱部でした。初めての全国大会の舞台、しかもトップバッターで、指揮者も子どもたちも緊張気味の演奏だったように思います。結果は、銅賞。残念ではありましたが、多くの演奏を聴くことができ、全国レベルを知れたことが何よりの経験となりました。さあ、次こそは金賞目指して…と思っていたところ、翌年はコロナのため中止。その翌年は音源で参加しましたが、またもや銅賞でした。そして二〇二二年は、三年ぶりに大阪府堺市で開催された全国大会へ出場することができました。全国の舞台で歌えること、マスクなしで歌えることの喜びを味わいながら、楽しく演奏することができました。

「また銅賞かもしれないけれど…銅賞じゃなかったらいいな」などと話しながらの帰路で結果を聞くと、なんと「金賞」！すぐに私の携帯電話には、メールや電話でのお祝いのメッセージが届きました。今年度もNコンは、四国大会では奨励賞でしたが、十一月に福岡市のアクロス福岡で行われた全日本合唱コンクール全国大会では、「銀賞」を頂くことができました。

保護者の皆さんはもとより、合唱連盟をはじめとする県内の合唱を愛する方々からも励ましや応援をしていただけることに感謝しています。子どもたちと共に日々、合唱を楽しみつつ、こうしたコンクールへの挑戦を通して、成長を感じています。Nコン全国大会出場と全日本合唱コンクール全国大会での金賞受賞は、これからも大きな目標です。今後とも、応援をよろしくお願いいたします。



ほりうち ちさの

一九六九年 馬路村生まれ。

高知大学教育学部附属小学校教諭

「アンテナ」 仁淀川チューブ下り

下尾 仁



二〇一二年の夏、店の常連客である岡崎さん、永野君、島崎君と何か面白い事をやろうという話になり、意見を募った。すると僕が会社員だった時の後輩でもある島崎君が「タイヤのチューブで川を下り、海まで行くのはどうか」と提案。それは面白そうだならばいつ、どの川を下るのか話し合い、八月二十二日、仁淀川の筏津ダム（越知町の自由軒のすぐ上）付近をスタート地点にして、一泊二日で海を目指す事になった。僕と島崎君が川下りしているところを岡崎さんがビデオ撮影し、永野君がサポーターするという冒險チームが出来あがった。

ウェットスーツやチューブなど必要な物を準備し、迎えた当日の朝五時半、雨が降りカミナリがゴロゴロと鳴り、心配もあったが天気予報は晴れになるとの事。スタート地点に着いた時には絶好の川下り日和になっていた。出発前にビデオにむかって意気込みと備品説明。チューブから落ちた時にチューブだけが流されていかないように、一・五メートル程の長さのヒモをお腹とチューブにくくり付けた。これが大変な事になるとは、この時は思いもよらなかった。

と流されていたが、川が広くなると流れがなく、オールで漕いでもチューブなので推進力がない。歩いた方が早いぐらいで、コスモスまつりの会場でもある宮ノ前公園まで四時間程かかってしまった。これでは海まではとても無理だと思いながらも川下りを楽しんだ。激流ポイントは本当に凄く激しく流れるという感じでスリル満点であった。

途中、所々で岡崎さんとも話をして本日のキャンプ地点を決めたつもりだったが、話し合いが上手くいっておらず、気が付くと辺りは真暗。しかも岡崎さんらスタッフチームとはぐれてしまった。携帯電話もなく連絡の取りようもない。大自然の中では人間なんてちっぽけなものである。しかたなく国道の電灯のある所で待機した。向こうも相当心配しているであろう。その時、対岸からバッシングをしている車が。直感で岡崎さんだ！と思い、劇団で鍛えた発声で力の限り「岡崎さんー」と呼び続けた。そうするとバッシングは消え、しばらくして「見つかった本当に良かった」と僕たちの所へ来てくれた。僕の声もしつかり聞こえたようだった。

川に流され続けて十二時間、疲れた体でテントを張り、パエリアを作り

少しのお酒を飲みながら反省会をして、眠りについた。相当疲れていたのであらう、爆睡し気持ちのいい朝を迎えた。島崎君は一日目がよっぽど疲れたのかテンションが低い。しかしここに救世主が現れた。僕たちが面白そうなる事をやっているのを聞きつけた友人の千頭君が「参加したい」とハイテンションでやってきた。このテンションにのせられ島崎君も元氣を取り戻した。

海までは無理でも行ける所まで行こうと円陣を組み、朝七時半、二日目スタート。すぐに激流ポイントに出くわして流れにのみ込まれ草薙に突っ込んで洗礼を受けた千頭君だったが、本人は「楽しいー気持ちいいー」と依然ハイテンションであった。

しばらくして過去一番の激流が：。その先には、一〇メートル程の太木が川に沿って倒れ、太木の根っこに凄く勢いで激流が当たっている。あそこに流れ着いてしまったらかなり危険であるが、千頭君はオールもなくコントリール不能。とっさに僕は力いっぱい千頭君のチューブを根っこの方に行かないように蹴った。するとその反動で僕が根っこに吸い込まれて水中に。太木の真下に入りこんでしまった。そのまま流されればいいのだがお腹にくくり付けているヒモが仇になってしまった。チューブが水面の根っこに引っ掛かり僕は水中でどうする事も出来ない。凄く水圧に揉まれ、終わつたと思つた。その瞬間、ブチっという音とともに幅八ミリほどのナイロンのヒモが切れ、僕は木の下を凄くスピードで流され出した。先はどうなっているのかもわからない。すると光が見え、水面にボコッと浮き出た。かなり先まで流れていた島崎君と千頭君は僕の名前を叫んでいた。近くの河原に上がりウェット

トスーツを見ると、太腿の部分は裂け、激しさを物語っていた。千頭君も最悪の事態が頭をよぎったらしいが、幸いにも怪我はない。さあ、これからどうするか。チューブも一つなくなり危険な目にもあったので、ここでやめる事も考えたが、何となくそれを残念に感じた僕は、三メートル程の枝を二つ見つけ、これを二つのチューブにくくり付けて筏のようにして先を目指す事にした。これはなかなか推進力があり、流れのない所もいいスピードで進んでいた。が、またしても激流。三人を乗せた。筏もどきどきは岩に激突して大破した。ちょうど「土佐和紙工芸村くらうど」の所だったので、僕たちの冒険はここで終了する事にした。

しばらくして仁淀川でラフティングガイドをやっている方が店に訪れたので太木の事を聞いてみると、「あれは本当に危険なのですぐ注意してます。よく生きてましたね」と言われた。

川下りの様子を記録したビデオの編集を永野君がやってくれて、皆で鑑賞会を開催。生きているからこそ楽しく見れた。今、生きている事に心から感謝しつつ、人生一回きり、楽しそうな事やりたいたい事はできる範囲でやっていきたいと思う。

川下りの続きはいつやる？と島崎君に聞いたら、もういいですと言った。

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

高知市文化振興事業団 12月の事業から

高知市文化プラザかるぽーとリニューアルオープン記念事業

第七回高知市民ミュージカル

「Gift of Life ～にぎやかな植物園～」

令和五年十二月十六日（土）・十七日（日）に第七回高知市民ミュージカル「Gift of Life ～にぎやかな植物園～」を開催しました。

高知市民ミュージカルは、一九八九年に第一回目を開催した当初より、公演のつ

ど一般公募のオーディションで選ばれた出演者と、ジャンルを超えた多くの文化関係者がスタッフとして集い、長い練習期間を通して双方が信頼感と連帯感を築きながら、素晴らしい舞台を創り出してきました。

十一年ぶりの開催となった今回の市民ミュージカルですが、その出演者の募集は前回までとは少し違った方法としました。「誰でも参加オッケー！ みんなでつくるミュージカル！」という呼びかけのもと、参加の対象者は小学生以上であれば性別経験、障害の有無は問いません。前回までは当然のようにあったオーディションをなくし、応募してくださった誰一人落選しない、配役を決めるための「オーディションワークシヨップ」としました。当日の五月五日

と六日、会場には六歳～八十歳までの参加者が集まりました。緊張のなか身体をほぐして準備する人、期待に胸を膨らませ「待つてました！」とばかりに意気込む人、十一年振りの再会を喜ぶ前回の市民ミュージカルの参加者らの姿がありました。

最終的には私たちの想定を大きく超える出演者九十名、サポータースタッフ二十六名から成るミュージカル劇団「はびぶら」（ハッピー・プランツの略）が誕生しました。当初は四十名ほどの人数を想定して準備を進めていて、出演者の人数に合わせて急遽台本を書き換える作業もこのとき同時に決定しました。

今回、多くの方の参加があった理由のひとつとして、いきなり出演者を募集するのではなく、その少し前に演出や講師陣による「ミュージカル体験ワークシヨップ」を開催したことが挙げられると思います。「興味はあるんだけど…」「そもそもミュージカルとは?」「私にもできるのかな?」と参加を迷っていた方たちに事前に練習の

様子やレベルを知っていただく良い機会となり、それが安心に繋がって応募に踏み切れたという参加者の声も多く聞かれました。

市民ミュージカルの稽古日は、水曜日と日曜日の毎週二回を基本としました。しかし出演者が九十名ともなると、なかなか全員揃うのが難しく、脚本、振付ともにブラッシュアップしていく中で欠席者への引継ぎにも苦労しました。十一年前よりもLINEやYouTubeが浸透し、連絡や情報交換のツールも増えていましたが、やはりそれらでの引継ぎにも限界がありました。公演日が近づくと稽古日以外にも自主練習日を設けるなどしてお互いにカバーし合う団員らに助けられました。また、出演者、スタッフ共に年齢や経験を重ねたベテラン勢が脇を固め、若い人や初参加者がメインとなる箇所が多く見られ、アドバイスを貰いながら一生懸命に追いつき、足並みを揃えようとしていたことが、市民ミュージカルの裾野の広がりを感じ、有意義なことに思えました。

今回の市民ミュージカルの柱のひとつに「障害の有無に関わらずに楽しめる舞台を創る」という課題がありました。このヒントを探ろうと、日本障害者舞台芸術機構の南部充央さんを講師に迎え、「誰もが文化芸術を楽しむためには」というテーマで「障害とは?」「必要なサポートとは?」について考える場を設けました。日常とは違う空間である「劇場」での障害について考えを深められる文化芸術の運営に即した具体的な内容で、知りたい事尽くしの充実した勉強会でした。「障害とは人にあるのではなく人と社会の間にある隔たりこそが障害」という考えが、誰もが楽しめる市民ミュージカルを制作していく上で大切なベールスとなりました。

また十月にはアウトリーチとして演出、講師陣、一部の出演者らで、児童発達支援事業などを行う福祉施設「Uプロジェクト」を訪問し、「歌って踊るミュージカルプチ体験」を行いました。何かを指導するのではなく、皆で一緒に楽しむというスタイルにし、Uプロジェクトの職員さんからは発達障害を持つ方との接し方やサポートの仕方のアドバイスを受けるなど、アウトリーチを通して相互に勉強することを目的としました。

ダンスに初めて挑戦する方や言葉としてすぐには理解することが難しい方に、どうやって振りを覚えてもらうかを考え、絵を指差して瞬時にそれを真似てもらおうという方法になりました。参加者の皆さんも終始笑顔で取り組んでくださり、講師陣の教え方のバリエーションや演者をも楽しませ

るその魅力に、この方々を市民ミュージカルの講師にお迎えできている事を心強く感じた瞬間でもありました。一時間程度の練習を経て、保護者への発表の時間を設けました。参加者の皆さんが楽しそうで、とても誇らしげに見え、「できた!」という達成感を各々が持っていたように思えました。二度ほどアンコールをいただき、大盛況のうちにアウトリーチを終えました。

当初、十二月十六日と十七日の二日間それぞれ一回ずつの公演を予定していた市民ミュージカルですが、「もっと公演数を増やしたい!」という団員たちの熱い思いのもと、チケットの売れ行きは絶好調。このため十一月には何と追加公演を決定。十二月十六日の公演回数を増やすことになり、その結果、全三公演、延べ二千二人の方

に観劇していただくことができました。

本番前のある日、「素人を集めてチケットを売って大丈夫か」と市民ミュージカルの取材に来た方に問われたことがあります。普段は隣のデスクでパソコンをたたいている同僚、お母さん一緒に遊んでくれるおじいちゃん、確かに参加者のほとんどが「ミュージカル素人」です。でもそんな人たちが七カ月間、必死に稽古を重ねたからこそ、プロのミュージカルとはまた違う「何か」を公演にできてくださったお客様に持ち帰っていただけたのではないかと思います。

いま本番を終えてみて思うのは、こんなにも情熱を傾けられるものがあるのは本当に豊かで幸せなこと。しかしそれと同時に、こんなにもエネルギーを持った人たちの中には、十一年の間、何の文化活動も行わず、ただただ次の市民ミュージカルを待っていたとおっしゃる方もいて、とてももったいないと感じました。

終演後に聞かれた「今回の市民ミュージカルは少なくとも十一年ぶりということにはならないように!」という参加者の声を胸に、また次回に繋げていければと思います。

会場 高知市文化プラザかるぽーと大ホール



挑戦は趣味

風俗歳時記



新年早々、前澤友作さんのドキュメンタリー映画「僕が宇宙に行った理由」を見に行ってきた。前回JAXAの宇宙飛行士試験を受けた私は、宇宙に行くのはどれほど過酷なのか改めて認識しようと思ったから。民間人も比較的安価に宇宙旅行ができる時代が来るだろうが、映画を見て「宇宙に行くのは過酷過ぎる」というのが率直な感想だ。

まずは宇宙飛行できる身体かどうかが最大のポイントとなる。親知らずは四本とも抜歯、副鼻腔炎は手術、網膜の奥に少しでも水が溜まっていたら失格など超健康体が必要される。その上で、身体の機能を壊すようなトレーニングに繰り返し耐えなければいけない。

無重力状態では骨粗しょう症が高齢者の十倍以上で進む。大気圏に突入する時には8G（重力加速度）の圧がかかる。その訓練は、全身の血が足に下がって気絶するほどだ。そうした過酷な訓練を半年以上続け、最終合格した人だけが宇宙への切符を手にする。

宇宙を飛行している間、前澤さんはテレビや新聞のインタビューを受け、「宇宙に行って変わったことはありますか？」との質問を何度も受けるうんざりしたそつだ。「僕って何か変わらないといけないの？」確かに、私たちマスコミの人間はすぐに物事の前後の変化を聞きたがる。しかし、「宇宙に行きたいから行く」という初心によって突き動かされている人は少なくない。そ

ういう私は、宇宙に行くかも知れない人とお友だちになれたかったから。こんなシンドルな理由である。

映画の最後の言葉は印象的だった。「何故、宇宙へ行くのか。挑戦は趣味だから」。私もこの言葉には賛同する。私は今年九月には三十七年勤めた会社を定年退職し第二の人生が始まる。次の宇宙飛行士試験は受けるかどうかは未定だが、すぐに挑戦できるよう今年は海外にも飛び出す予定だ。「お母さん、その年で単独留学!? やるやん」と子どもたちが控えめなエールを送ってくれた。「挑戦は趣味」と言い放てるよう、心身共に準備したい新春である。

(立花香)



高知を撮る

第37回写真コンテスト入賞作品

露店商

窪田 洋一

(撮影場所/昭和36年2月 高知市丸ノ内)

昭和36年頃、日曜市でなく藤並神社近くで、戸板一枚で口上で道行く人に面白可笑しく物を売る人が多く居た。

こどもから大人まで誰もが楽しめるコンサート♪

かるぽーと こども音楽会



【出演】

鏡野吹奏楽団、混声合唱団Pange、高知大学教育学部附属小学校合唱部

日時：2024年2月23日（金・祝）13:30開場 14:00開演

会場：高知市文化プラザかるぽーと大ホール

料金：全席自由 前売り500円 当日700円 ※未就学児入場無料（小学生から有料）

主催：公益財団法人高知市文化振興事業団

助成：公益財団法人スポーツ安全協会スポーツ活動等普及奨励助成事業

お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071 <https://www.kfca.jp/>



ばぶれるりぐる 「川にはとうぜんはしがある」

2020年関西演劇祭ベスト脚本賞、
同年の第26回劇作家協会新人戯曲賞に続き、
2022年「日本の劇」戯曲賞最優秀賞を受賞。

高知県土佐清水市出身の劇作家・俳優の
竹田モモコによる日本演劇界最注目ユニット
ばぶれるりぐる、待望の新作公演。

日時
2024年2月29日（木）18:30開場 19:00開演
2024年3月1日（金）18:30開場 19:00開演

会場
高知市文化プラザかるぽーと小ホール

料金
全席自由
一般 前売り3,800円（当日4,300円）
22歳以下 前売り2,500円（当日3,000円）
※未就学のお子さまはご入場いただけません。

主催・お問い合わせ
公益財団法人高知市文化振興事業団
088-883-5071 <https://www.kfca.jp/>

風 伯

月夜の黄金ヒバ

間照明の下、馬を見ているお客さんはとても静かだ。黄金ヒバのずっと向こう側にお城のような遊具があって、子どもたちの歓声が聞こえる。
やがて一から十二のゼッケンを付けた馬たちが反時計回りに、パコ、パコ、蹄音を響かせ、グルグル黄金ヒバを回ります。グルグル、パコ、パコ。私は時計の針が逆するように、昔に思いを馳せる。

夢を見ていて、これは夢だとわかる時がある。私は夜の競馬場にいる。馬を下見するためのパドック。目の前には立派な黄金ヒバが一本立っている。私は馬と騎手の号令係だ。
黄金ヒバの斜め上に明るい三日月が浮かぶ。競馬スタンドの上方、場名のロゴと馬のデザインが美しく光る。時々パドック横の馬頭観音さんの鈴が鳴る。夜

そうだ、この黄金ヒバは、昭和天皇ゆかりの大切な木なのだ。
戦前の昭和期、高知に国立の種馬所があった。種馬所の桜と今もいう。昭和期半ば、そこは林業試験場。植樹祭で、陛下のお手まき会場後方を彩ったのは黄金ヒバだった。昭和の末頃、皇室と馬は関わりが深いことを知る賢人が、その一本を新競馬場に贈った。
パドックの真ん中に木が立っている競馬場なんて、日本中で高知だけでは、だって、木がじゃまで馬が見えにくいもの。実際昔はけっこうそう言われた。でも、今はお客さんもそんなこと言わない。静かに馬と黄金ヒバを眺めている。
夢だと思ったが、これは夢ではなかった。私の目の前には本当に昭和の好記念樹、黄金ヒバが立っている。それはどんなに幻想的体験で興味深い史話であっても、この世の景色、物語。

（三）

今号の表紙

彩を添えて

宅間 琉陽

高知には色んな魅力が詰まっています。全てを写真では表せないで、文字と色を沢山つけて表現しました。

（たくま りゅうび／
龍馬デザイン・ビューティ専門学校1年）

日本を代表する木管五重奏団クインテット・アッシュ、14年ぶりの高知公演！

木管五重奏 Quintet H Concert

第12回

高知の
音楽活性化事業

Program

久石譲「映画「千と千尋の神隠し」より」いつも何度でも
ロジャース「サウンド・オブ・ミュージック」セレクション
モーツァルト「歌劇「魔笛」序曲
イベール「3つの小品」他

2024年 3月8日[金]

令和5年度 公共ホール音楽活性化支援事業



かるぽーと

高知市文化プラザかるぽーと
[大ホール] 開場 18:30 開演 19:00

チケット

	一般 / 前売り	当日	全席自由
高校生以下	500円	600円	
※3歳から有料 ※前売券完売の場合、当日券の販売はありません			

お問い合わせ

公益財団法人高知市文化振興事業団 TEL:088-883-5071
<https://www.kfca.jp/kikaku>